

入賞作品

帰宅の旅くゆる内陸線と私の心

千葉 暁

無人駅に到着した。過疎化が進んでいて、文字通り誰もいない。今日は訳あって、この「秋田内陸線」を利用して帰宅することになった。普段内陸線に乗ることはない。最後に乗ったのは、何年前だったか。その時は付きそいがいたが、今日は一人だ。そんな感じだったか覚えていないから、緊張している。

列車がやって来るまでは、あと四、五分といったところ。待合所があつたが、虫でもいそうなので外で立って待っている。内陸線はどんな感じだったか思い出してみる。一言で表すとすれば、ガタンゴトンというワードが出てくる。いや、もう少し強かったか、ガッタンゴットン、ギッタンバッタンズンドコズ。そんなふざけたことを考えていると、線路の向こうから光が見えた。ついに来たか。私以外に乗客はいるだろうか。私は臆病なのであまり人が乗っていないとうれしい。内陸線の姿が明らかになった。一両編成で、心の落ち着く青色をしている。私の目の前にドアが来た。かんぺきな停車だな。

ドアが勝手に開いた。プシュー、という機械じかけのような音で。どこかロマンを感じる。内陸線初心者私だが、さすがに無知では来ない。母さんから説明を受けて来た。まず乗り込ん

だら整理券というものを取るらしい。んん、あれ？整理券と書かれた機械はあるが、紙のようなものは見当たらない。押せそうなものを押してみるが、整理券らしきものは出てこない。ドアが閉まり、内陸線は発車してしまう。立っていられなくなってきたので、あわてて近くの席に座る、これはやばいのではと思ったが、なんとかなるでしょう精神で、とりあえず別のことを考える。私以外には五人くらいの人が乗っていた。皆けっこう前方の席に座っていて、私は一番後ろだ。あせっている姿は見られていないようなので、まあ良かった良かった。

この内陸線、なかなかの快速である。ギッタンバッタンとまではないかないが、ガッタンゴットンはしている。そこその声量で歌っても他人には聞こえなさそう。窓の外をしてみる。おお、田んぼがずらり。窓に顔をくつつけたら、視界が緑で埋まりそう。田んぼしかない。しかし、この地平線まで広がっているような田んぼも、一つ一つに人によって丁寧に管理されていると思うと、人の姿が見えなくても、この大地にはたくさん

の人の生命の力が巡っていると自然に感じられた。気づいたら終点の駅だった。私のゴールはここなので問題は無いのだが、整理券をどう説明しようか悩んでいた。列車から降りると、外には料金を集めている駅員がいた。とりあえずその人のところに行ってみた。乗車した駅を言って、二百十円払うだけで済んだ。私の内陸線の旅は終わった。短い旅だったが、悪くない旅だった。友人たちに話すのが楽しみだ。さて、目標は帰宅。この先は徒歩の旅といきますかね。